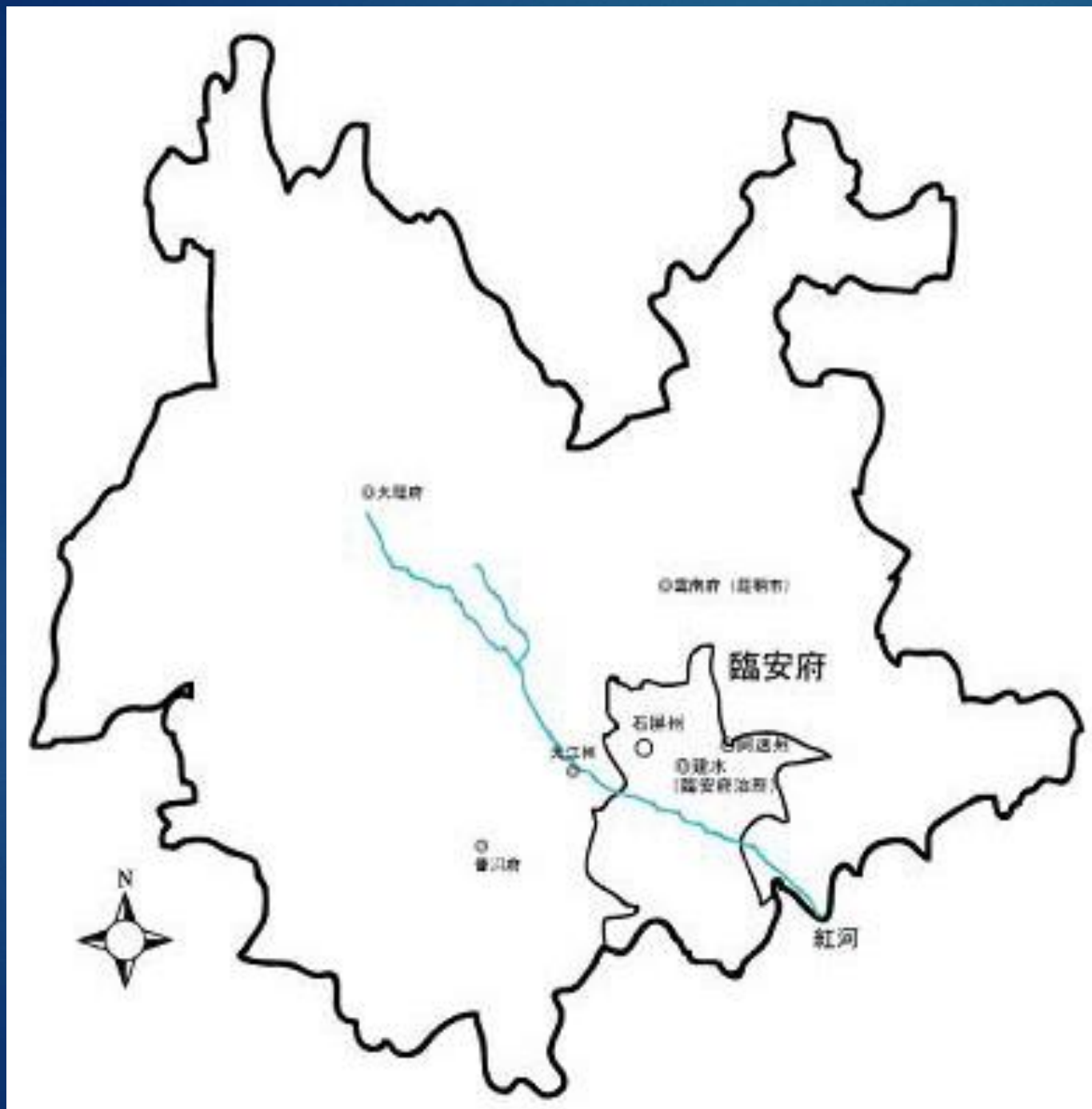


雲南中華世界の膨張、絶え間なく移住する人々 —石屏県と普洱茶（プーアル茶）を巡る歴史の中で

早稲田非常勤講師 西川和孝

I 石屏盆地の開発と限界

雲南省全体図



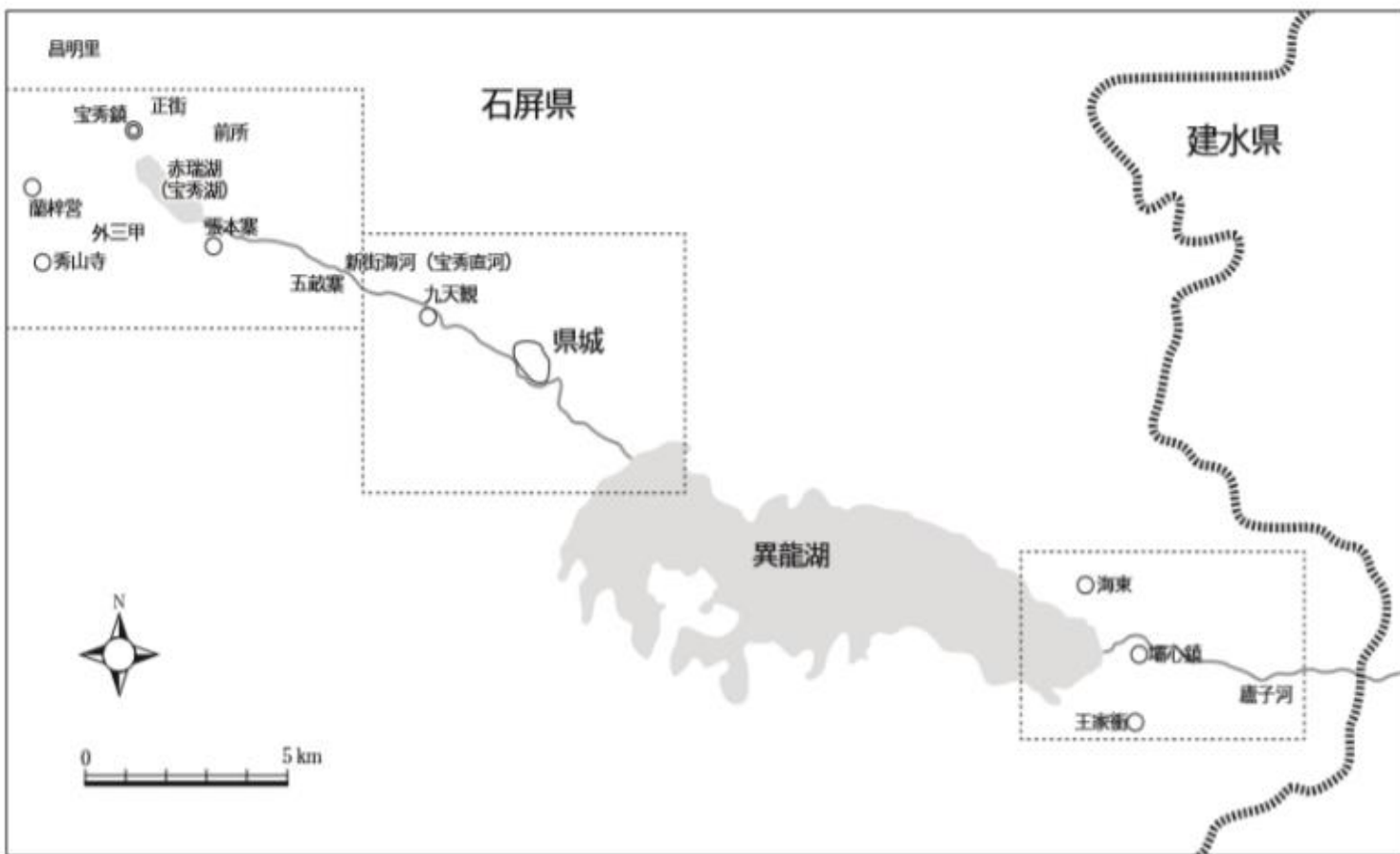


图2 石屏盆地图

典拠：雲南省測繪局編印 1990 年『石屏県地図』を参考に作成

石屏盆地 図

①明代石屏県における土地開発の進展

α明代前半期

- ・ 明代初めに屯田を設置
- ・ 傾斜を利用した流水灌漑と溜池灌漑
による耕地開発が開始
→簡単な技術と少ない資本で可能な耕地開発

清理鄭營民 水碑記

建 一處坐落... 清理鄭營民水碑記... 乾隆拾壹年歲在丙申陸月貳拾捌日董事人王蒙寶胡騰昆李極

- ▶ 調べるところによれば、周氏の隊伍の原籍は湖広辰州府の阮州平變漢大魚塘七鰲寨の人である。そして李氏従軍脚冊の記載によると以下のとおりである；
- ▶ 明・洪武十一年(一三七八) 九月 より、木（沐）国公に従軍して雲南に遠征し、百戸鄧忠・小旗李保児は雲南前衛に駐屯する。
- ▶ 洪武十五年(一三八二)、富民・新興・仁徳などのところに遠征する。
- ▶ 洪武二十年(一三八七)、雲南前衛に百戸の施徳・小旗の李衷が来た。
- ▶ 洪武二十一年(一三八八)、定辺県、広南の龍海衛へ次々と遠征する。
- ▶ 洪武二十八年(一三九五)、張彬は百戸となり、小旗の李衷は、摠旗に昇進した。このため婁姓の人が小旗となる。
- ▶ 洪武二十九年(一三九六)、雲南左衛に転属となり、後にまた中衛に配属される。
- ▶ 洪武十一年(一三七八)から建文四年(一四〇二)まで二十六年間の二人：李保児・李衷は雲南衛に駐屯した。
- ▶ 永楽元年(一四〇三) 二月、臨安衛に転属となる。
- ▶ 宣徳二年(一四二七)、周斌は百戸となり、李信は摠旗となった。
- ▶ 正統二年(一四三七)、李春選は摠旗となる。
- ▶ 成化元年(一四六五)、周原は百戸となり、李政は摠旗となった。
- ▶ 正徳二年(一五〇七)、周俊は百戸となり、李時は摠旗となった。
- ▶ 永楽元年(一四〇三)から嘉靖十九年(一五四〇)までの百三十六年間、十人：李衷・李信・李春選・李政・李時などは臨安に駐屯した。
- ▶ 嘉靖二十年(一五四一)、百戸の周継祖と正軍一世祖の王源は、石屏州の宝秀に転属となり、駐屯地を張家営と称した。
- ▶ 嘉靖三十一年(一五五二)、李朝佐は摠旗となる。
- ▶ 萬歴十三年(一五八五)、百戸の周天福と摠旗の李逢陽と正軍二世祖の王珍至は隊伍を正軍に編入し、計三十六人となった。それぞれに屯田二十畝を受け取り、日々の地稅・出兵の用に当てた。

蘭梓宮小学校

竭诚欢迎领导
嘉宾莅临我校
指导工作！

保存状況

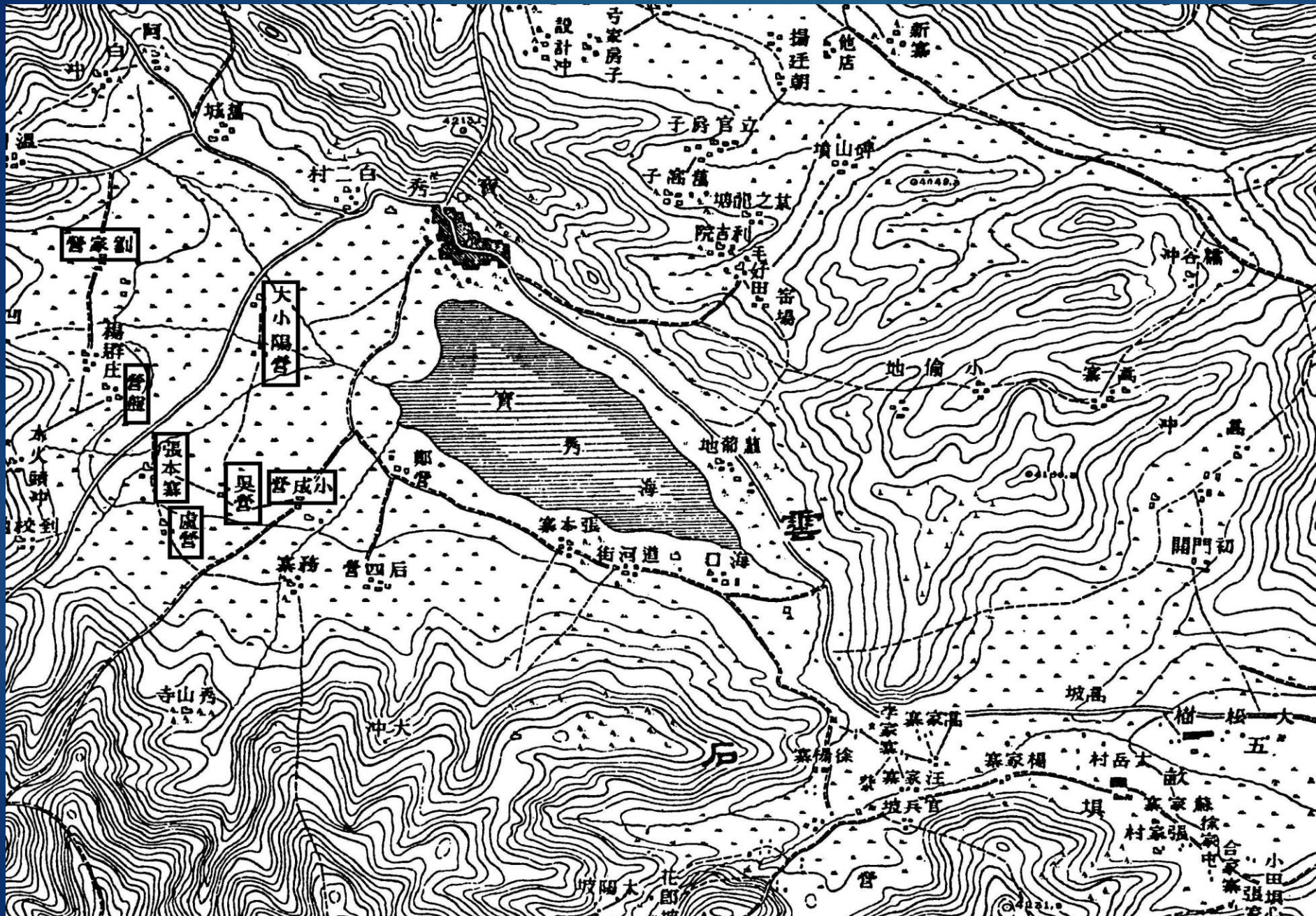


碑文の保存 状況





その他碑 文の保存 状況



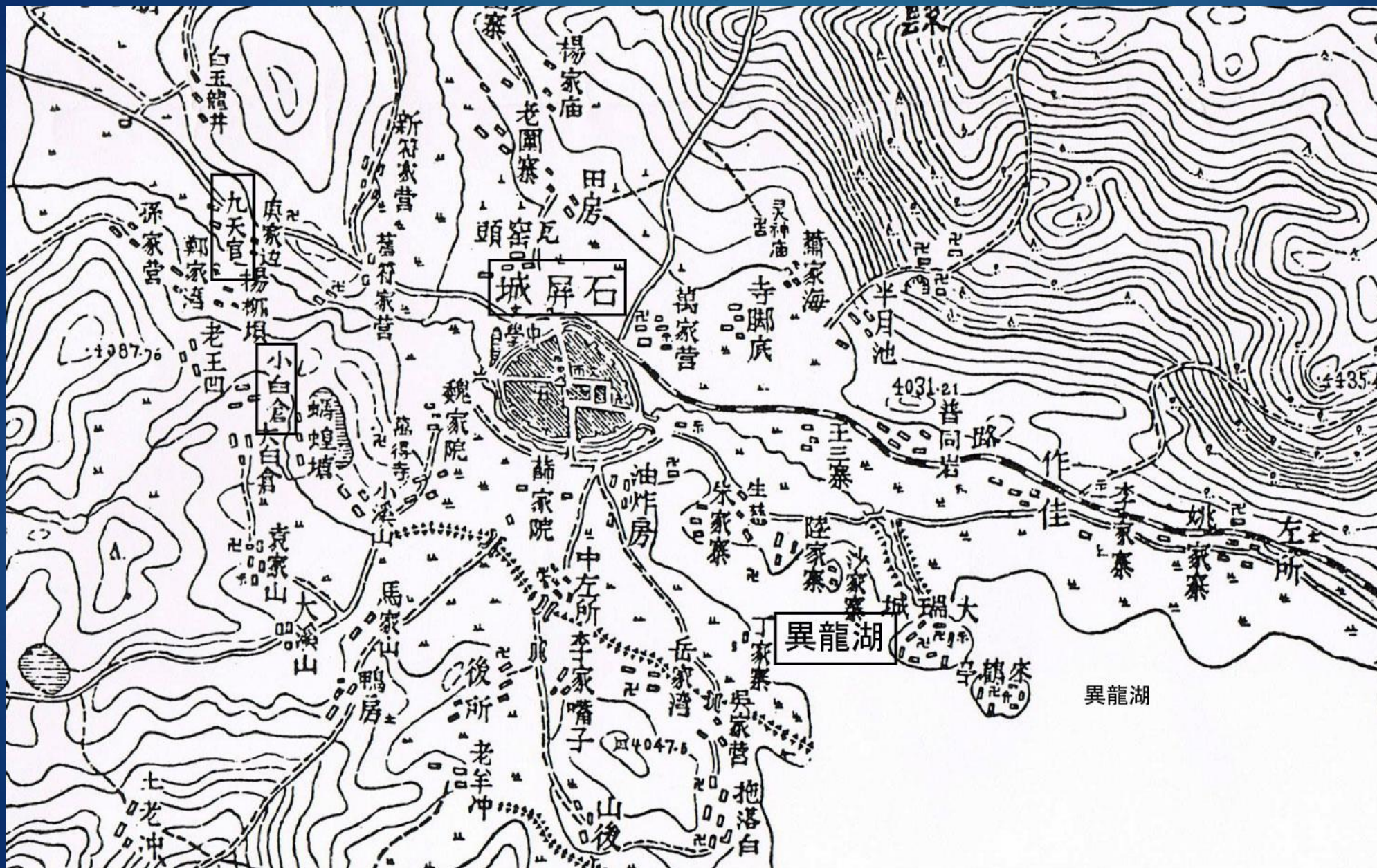
宝秀盆地 集落图

表2・貯水池一覧表			
貯水施設名	記載内容	典拠	備考
楊柳壩	其近処又有楊柳壩，以蓄淺水，利居民便之（その近くにまた楊柳壩があり、わずかな水を溜めて、居民の便に役立たせている	景泰『雲南図経志書』巻3、臨安府石屏、山川	
螞蝗塘	螞蝗塘は、州城の西方3里に位置し、幅は2里であり、秋から冬にかけて水を溜め、春から夏は水を流し、屯田を灌漑する（螞蝗塘在城西三里，広闊二里許，秋冬蓄水，春夏開泄，灌漑屯田）。	康熙『石屏州志』巻2、堰塘	
酸水塘	酸水塘は州城西方の符家営に位置する。幅は3里で、軍民の水利に利用される（酸水塘在城西符家営，広闊三里許，軍民資其水利）。	康熙『石屏州志』巻2、堰塘	
九天観閘	九天観閘在城西三里，明万暦六年知州曾所能移旧堤于百歩之上，就其罔陵之隘而扼塞之，蓄水以資灌漑。中為石閘，以時啓閉，至今民頼其利（九天観閘は州城の西方三里に位置し、明の万暦6〔1578〕年に知州曾所能が古い堤を百歩上に移して、丘陵地の狭くなっている所で塞ぎ，水を蓄えて灌漑に資した。中に石製の閘を設け、必要な時に開閉することで、これまで民はその利益を享受している）。	康熙『石屏州志』巻2、堤閘	明の万暦6〔1578〕年に知州曾所能が古い堤を百歩上に移すところから、ここには古くから貯水施設が存在していたことが伺われる。

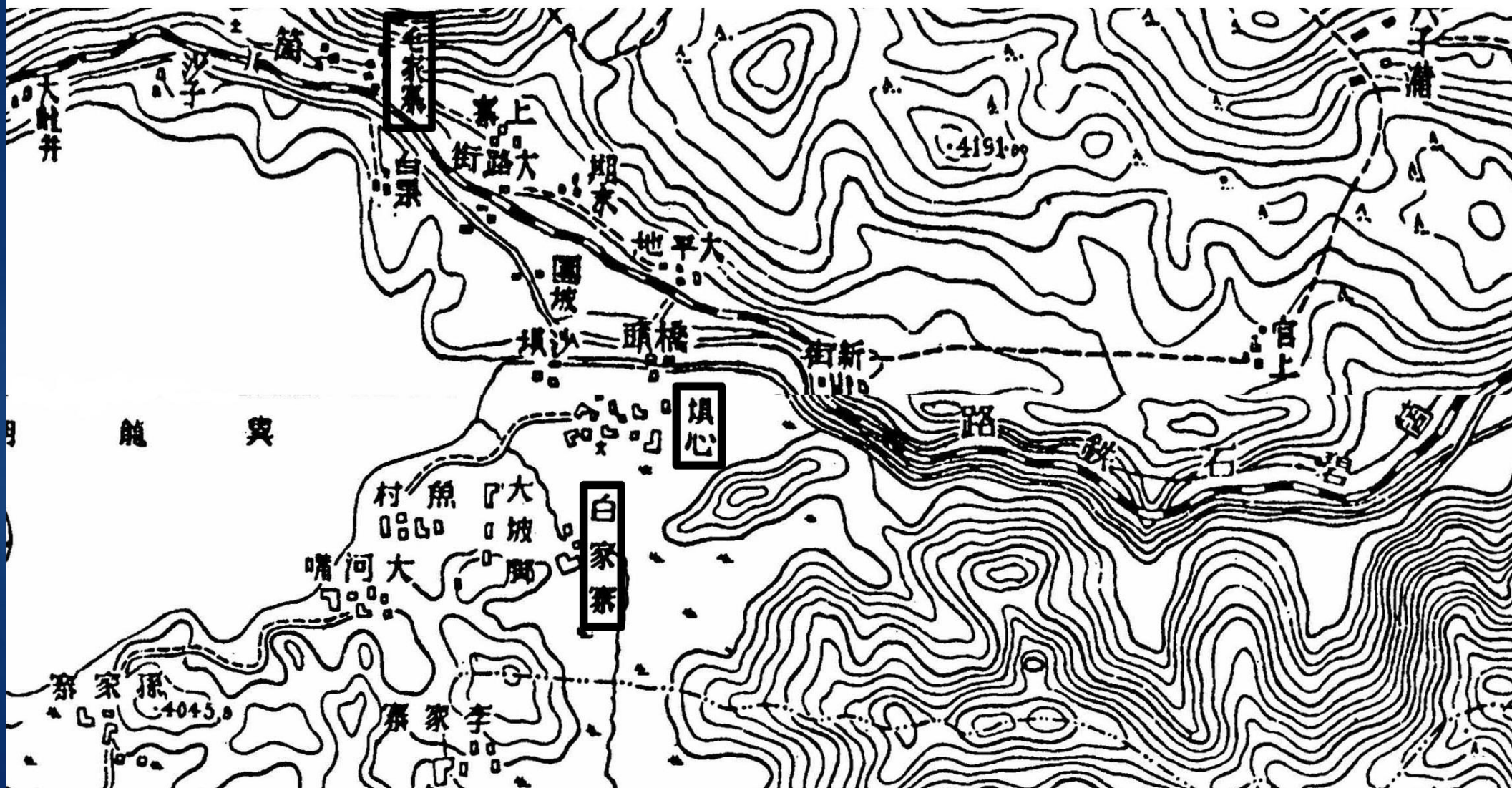
b 明代後半期

1 低湿地において官主導による大規模水利事業が開始

- ・ クリーク灌漑や囲田などの各種の水利技術を活用
 - 足踏み式揚水車である龍骨車が活躍
- ・ 河道の付け替えと浚渫などの治水工事
 - 雨季において洪水を防止し、灌漑に利用
- ・ 当時の技術で開発可能な場所は消滅
 - 大幅な耕地拡大が困難な状態に



石屏州城東
側クリーク
灌漑



異龍湖
東岸湖
出口部
の浚渫
行為

表3. 明清代における異龍湖の湖出口部の水利事業年表		
年代	事項	典拠
天啓年間	知州顧慶恩が湖出口部に流れ込む河川の工事を行ない、土砂流入を防ぐ。	乾隆『石屏州志』巻6、「海口説」
崇禎12年（1639）	知州朱統燧が湖出口部に流れ込む河川の浚渫工事をする。	乾隆『石屏州志』巻5、「朱州守生祠碑記」
康熙37年（1698）	知州張毓瑞が湖出口部の浚渫工事を行なう。	乾隆『石屏州志』巻5、「新濬海口碑記」
康熙57年、58年（1718-1719）	吏目の目葉芳が湖出口部の浚渫をして異龍湖東岸で新田開拓を行う。	乾隆『石屏州志』巻1、堤閘 乾隆『石屏州志』巻1、「新置海口田租碑記」
乾隆23年（1758）	知州管学宣が湖出口部の浚渫をし、さらに廻龍山に別の水路を開き、川の逆流に備える。	乾隆『石屏州志』巻1、輿図 乾隆『石屏州志』巻1、堤閘
乾隆38年（1773）	知州蔣振閔が浚渫工事を行なった上で、堤防を修築してその上に柳を植える。	乾隆『続石屏州志』巻2「廻瀾亭記」 嘉慶『臨安府志』巻5、山川
乾隆55年（1790）	知州台弼は堤防を建設する。	嘉慶『臨安府志』巻5、山川
乾隆56年、57年（1791-1792）	知州漆炳文らが台弼の事業を引き継ぎ堤防を完成させる。	嘉慶『臨安府志』巻5、山川
光緒7年（1881）	署知州顧芸が湖出口部の浚渫工事を行なう。	光緒『雲南通志』巻53
光緒10年（1884）	署知州王秉鑑が湖出口部の浚渫工事を行なう。	光緒『雲南通志』巻53

2栽培品種の選択により収穫量を増やす

- ・ 冷水に強い晩稲
ex) 冷水穀
- ・ 生長が早い早稲
ex) 百日草

②新たな生業戦略の展開

a 工芸作物の栽培

- ・ 稲、あわ、豆を活用して酒を醸造
- ・ 綿の栽培と織物
- ・ 桑や麻の栽培

b 手工業の発達

- ・ 赤銅品
- ・ 石屏の塩水を利用した豆腐

③盆地内部の土地効率化の限界

- ・ 盆地内の開発の限界に直面
→ 新たな生活の場を求めて移住活動を開始

※ 盆地開発のプロセス

入植→簡単な灌漑技術による耕地開発→
官主導の大規模水利開発→
土地投資の効率化→構造的飽和状態

石屏からの 移住ルート



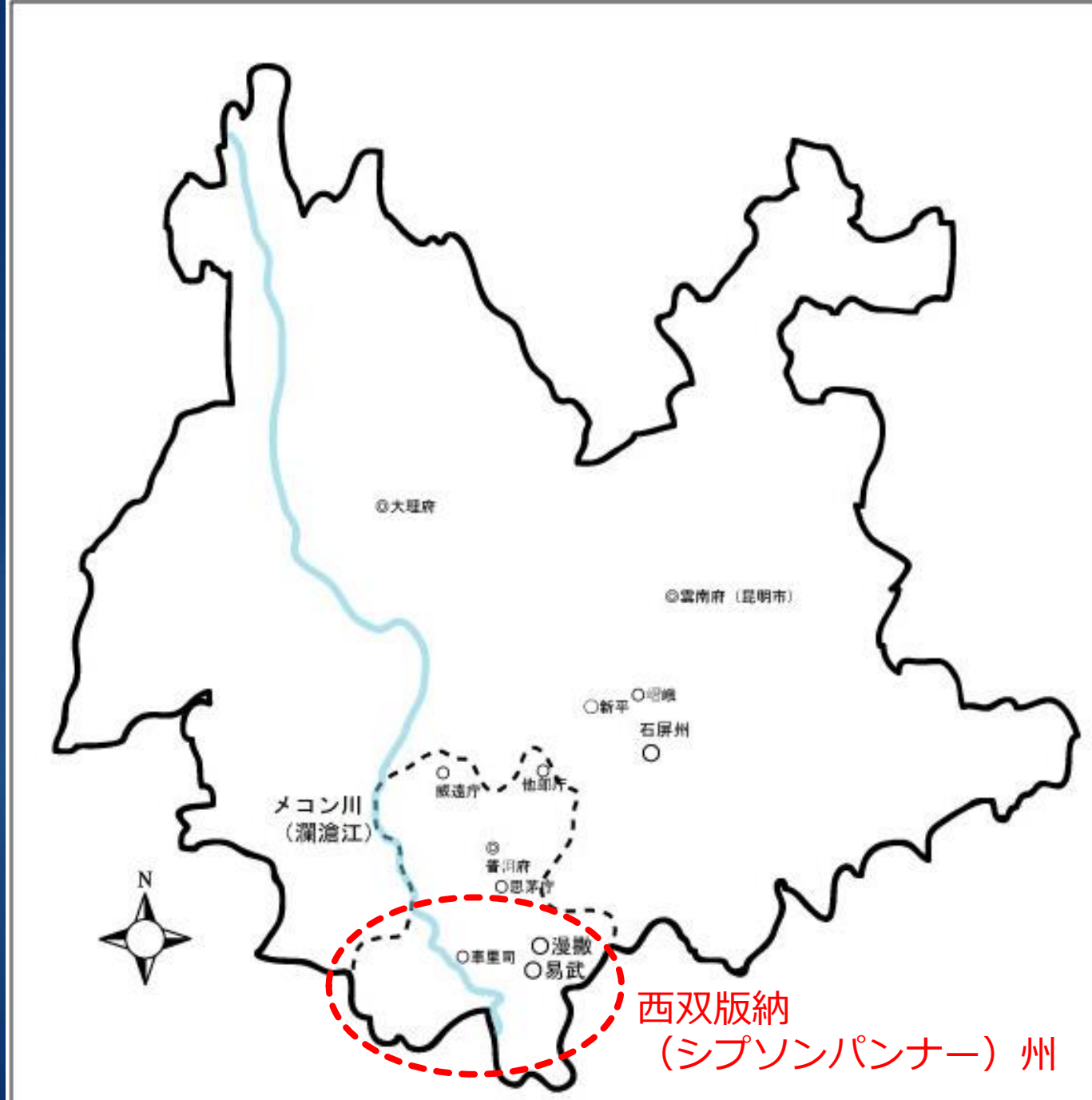
鉤山開発と交通路の整備

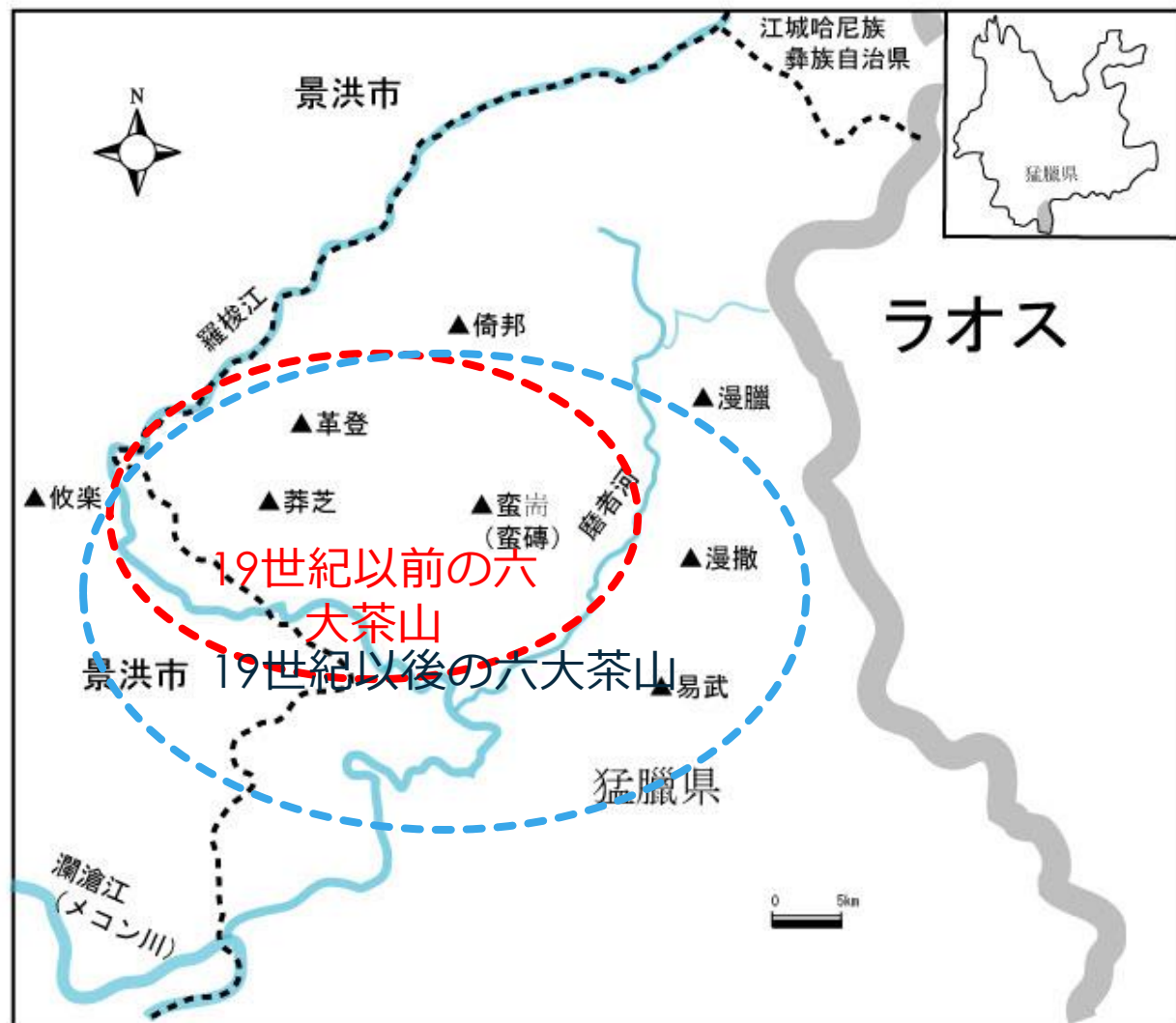
24

- ・清代以降、雲南省内で銅山開発が進展、運搬ルート
のインフラ整備により雲南経済が活発化
- ・雲南省内の交易路が全国の交易ルートに組み
込まれ、再編
⇒石屏盆地を出て外界へと向かう潮流を
後押し
- ・石屏盆地からルートに沿って各地に移動

Ⅱ 普洱茶（プーアル茶）の栽培

普洱府





六大茶山

①シブソンパンナー王国

- ・普洱茶は、現在の西双版纳州タイ族自治州猛臘県北部一帯の地域にある六大茶山《攸楽・革登・倚邦・莽芝・蛮崙(ばんたん)・漫撒（後に易武）》で栽培されていた。
- ・明清代（14c～20 c）、プーアル茶の産地は、タイ系土司のシブソンパンナー王国に所属

- ・ シブソンパンナー王国は、国王をリーダーとして、
12の（盆地）ムンをそれぞれ管轄する首長が従属する形で成立
- ・ 清朝政府は、シブソンパンナー国王に車里宣慰司使の官職を付与
- ・ 普洱茶は、当時盆地の周辺の山々で栽培され、プーラン族・ハニ族によって担われる

②普洱茶をめぐる衝突

α莽芝茶山の反乱

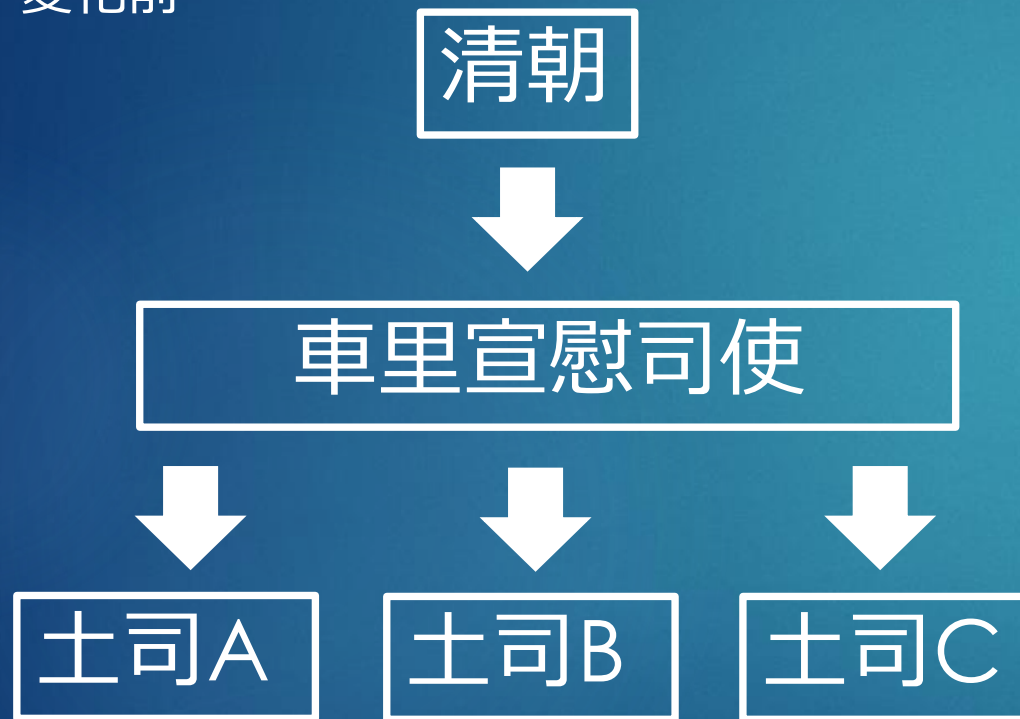
- ・ 清朝雍正年間（1722～1735年）には漢人商人が入り込み、当地で商売を本格化
→高利貸しで利益をむさぼる漢人に対して不満が蓄積
- ・ 雍正5年（1727年）に莽芝茶山で八二族の反乱勃発
→清朝は軍隊を派遣し鎮圧

b 清朝の茶山統治

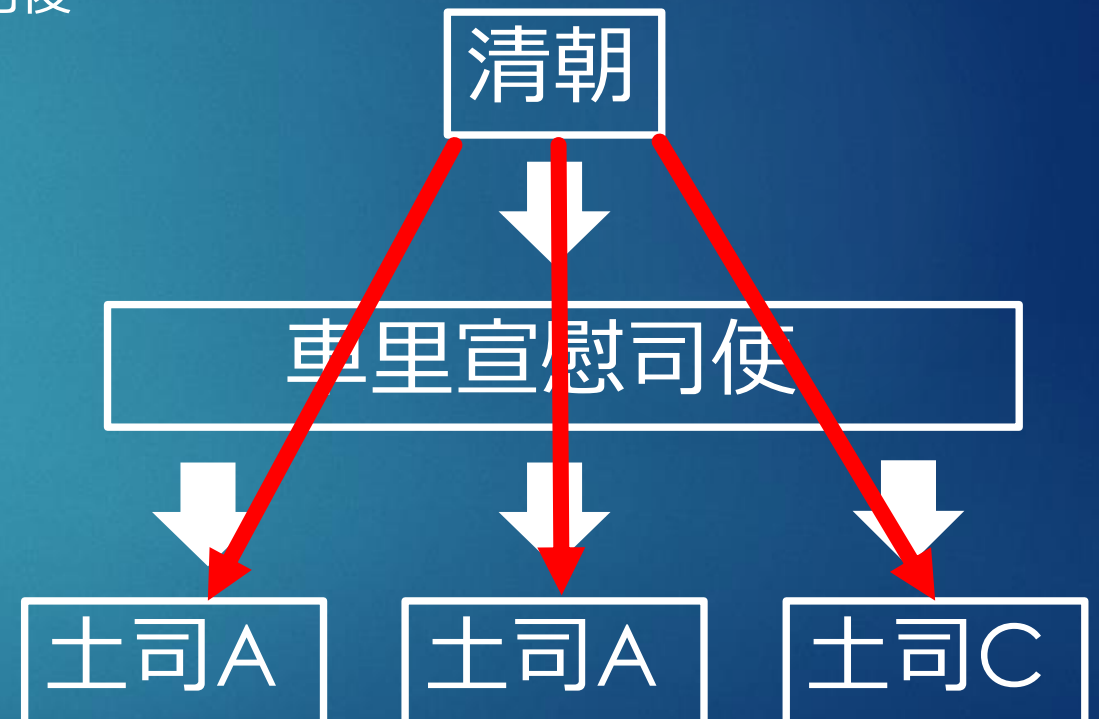
- 清朝は政府機関である普洱府を設置、六大茶山を統治下に
→土司に対する管理が強化
- 六大茶山は、地元有力者が管理
→攸楽・革登・倚邦・莽芝・蛮崙(ばんたん)の五山は倚邦土司が、漫撒茶山は易武土司が管理、貢茶の任務を負う
- 漢人商人の茶山への直接買い付けを禁止、取引は官設の交易場に限定
⇒清朝の方針は、あくまでも茶山からの漢人排除

清朝による土司支配の変化

▶ 変化前



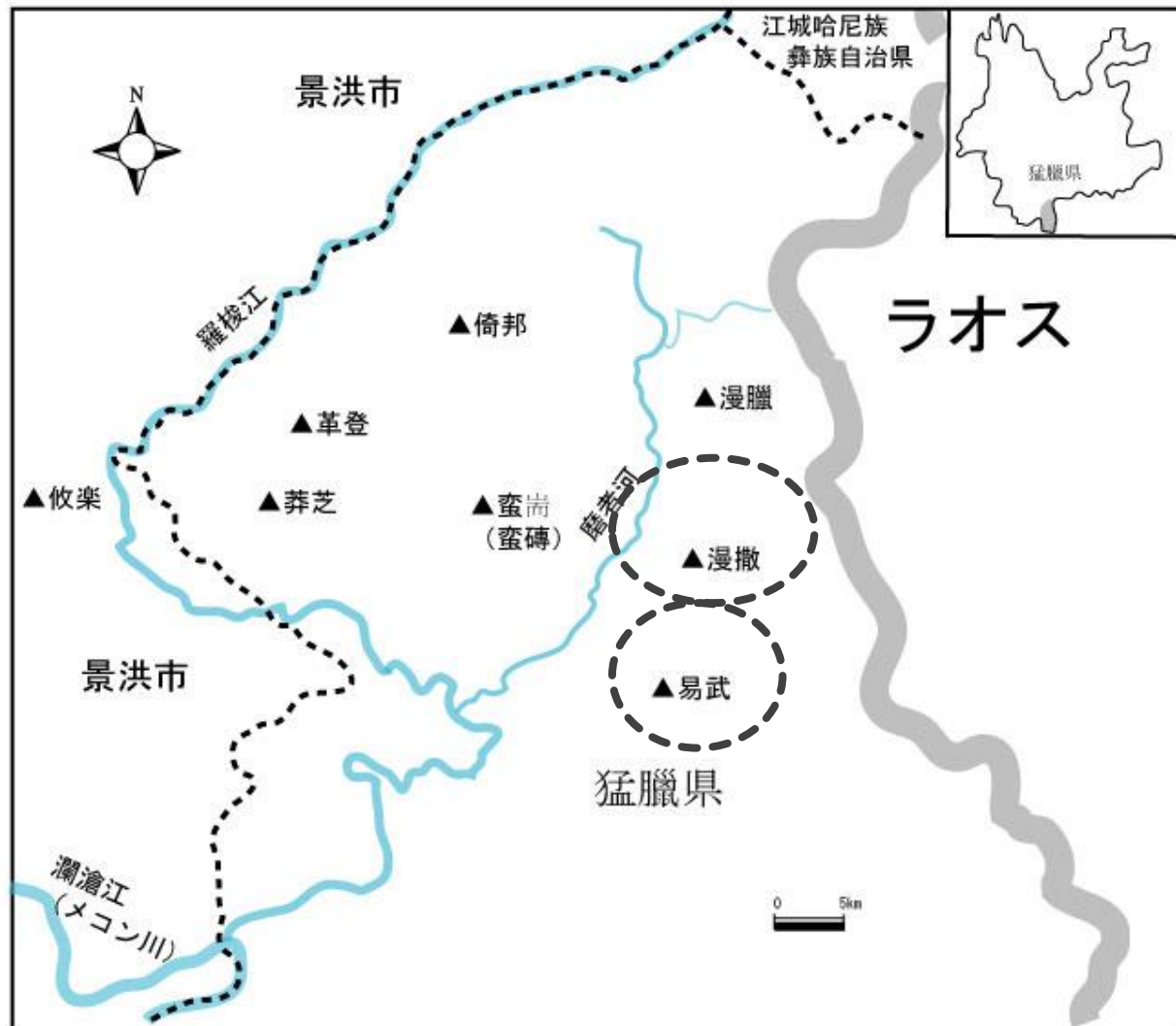
変化後



③六大茶山への漢人の浸透 (18世紀～19世紀)

普洱所属の六茶山は、攸楽・革登・倚邦・莽枝・蛮
崙・慢撒であり、その周圀は八〇〇里に及ぶ。そして、
山に入り茶を栽培する者は数十万に上り、茶客が茶を
買い上げ、あちこちで運んでいるため、道はいつも人
で溢れており、大変な富というべきである。

(引用：『滇海虞衡志』)



六大茶山

漫撒新建石屏會館記



丁未の年（乾隆五二年〔一七八七〕）に石屏漢人が集まって言うことには、我が石屏は……………、普洱には至る所会館があり、たとえ漫撒が辺鄙といえども、どうして会館がなくてよいであろうか。そこで、皆が少しずつお金を出し合い、正殿、陪殿（正殿の左右に位置する建物）、廂房（中庭を挟み、正殿の左右に位置する建物）、庁堂を建立した。

寄付については名前を左記に羅列し、後世の人々に思い巡らさせる。進士出身の蒙化庁教授加一級普洱府人である楊盧鋆が謹んで記す。

世襲管理茶山一帯地方部庁曹は銀五□両を寄付する。

世襲管理易武一帯地方部庁伍は銀六□両を寄付する。

思茅の趙純普は銀六□を寄付する。楊昭は銀…を寄付する。

（省略）

丁定桎は銀五両を寄付する。

大清乾隆五四年（一七八九）九月一六日、衆姓の薰沐が敬い刻む。

現在の漫撒











付近のヤオ族の村



易武茶山における石屏漢人の入植

- ・ 乾隆54（1789）年に易武土司が石屏漢人を招聘
→ 易武における茶園開発
- ・ 石屏漢人は道路や橋などの茶の運搬ルートに関するインフラ整備を進める
→ 地域社会における石屏漢人の存在感が高まる
- ・ 19世紀末までに普洱茶の栽培、物流、販売までを掌握

易武茶案碑

(道光18〔1838〕年
立碑)





旧石屏会馆
(2006年)



中国普洱茶古六大
茶山茶文化博物館
(現在の状況)

猛海 茶山



④石屏漢人のメコン川西岸猛海茶山への移住

48

猛海茶山への進出

- ・ 猛海に茶の加工技術を持ち込む
→ 茶荘では茶の加工技術を持つ石屏漢人が活躍
- ・ 猛海土司と婚姻関係を成立
→ 婚姻関係を通し地元社会に定着

漢人と山地民にみる茶栽培技術の違い

49

- ▶ 漢人の優れた茶栽培の技術

- 栽培段階における様々なきめ細かな対応

- ▶ 土着山地民の茶栽培

- 粗放的栽培

⇒ 皇帝に献上する貢茶は特に高品質が求められるため、漢人が持つ優れた栽培技術が効力を発揮。茶の技術を移転することで入植。

⑤中国沿岸市場との連結

- ・ 19世紀後半から欧米列強の影響力が雲南に拡大
→中国沿岸部との貿易が開始
- ・ 広東・香港市場に移出、一部はシンガポールまで輸出
→沿岸部の大消費地に連結することで輸出量増加

※確かな技術に裏打ちされた高品質の普洱茶と巨大市場である沿岸の経済圏との連結

小結

- ・ 石屏漢人は、盆地の土地開発において綿や麻の栽培
→植物の栽培技術において経験を蓄積
- ・ 漫撒茶山において貢茶の栽培に着手
- ・ 易武茶山において高度な茶の栽培技術を確立
- ・ 熟練した茶の栽培加工技術を携えメコン川西岸に進出

※茶の栽培技術を媒介として技術移転を繰り返すことで
居住地を拡大